



アルブレヒト・アルトドルファー 《二人のヨハネ》 について : 資料紹介と人文主義的要素

藪田, 淳子

(Citation)

美術史論集, 16:131-142

(Issue Date)

2016

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010479>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010479>



アルブレヒト・アルトドルファー 《二人のヨハネ》について

―資料紹介と人文主義的要素―

《キーワード》レーゲンスブルク、ドイツ人文主義、エピタフ

藪田 淳子

はじめに

レーゲンスブルク市立歴史博物館にあるアルブレヒト・アルトドルファーの《二人のヨハネ》(挿図1)は、アルトドルファーの作品としてはそれほど知られていなかったが、「二人のヨハネ」という主題の特異性や銘板との関係、人文主義的要素といった多くの問題をはらんでいるため、長年議論を呼んできた¹⁾。近年フランチ・フックスがこの作品に関する新たな銘文の存在を指摘したことで、研究は格段に進んだといえる。本稿では、こうした研究状況を紹介し、銘文と人文主義的要素について述べ、今後の研究の展望を示したい。²⁾

一、聖エメラム修道院とトラボルト

この作品は、レーゲンスブルクの人文主義者ヨハネス・トラボルト(一四二五―一五〇五年)の埋葬のために制作された。注文主は



挿図1 アルブレヒト・アルトドルファー 《二人のヨハネ》1507年頃
レーゲンスブルク市立歴史博物館

トラボルトの遺言執行者ハンス・ハウアーとゲオルク・ホルネッカー、ハンス・シユヴェーブラーという、それぞれ市の役職に就いた人物たちであった。³ 本作はトラボルトの埋葬場所である聖エメラム修道院に設置された。その後の来歴については一六〇〇年代から一七〇〇年代まで不明であるが、確かなものとしては、一八四六年の時点でレーゲンスブルクのシユタットアムホーフにあるカタリナ救貧院の礼拝堂に設置されていたという記録がある。⁴ その後一九二七年には修復のためミュンヘンのアルテ・ピナコテークに貸し出され、そして一九六八年から現在までレーゲンスブルク市立歴史博物館の所蔵となっている。⁵

本作の制作年については、博物館でも一五〇七年以降として展示されており、まだ特定されていない。福音書記者ヨハネの足元右側にはアルトドルファーのモノグラムが書かれた板があるが、年代については絵具の表面の損傷により明確には読み取れない状態である。

博物館の調査によると、モノグラムと年代の部分は数回にわたって加筆されているという。⁶ 赤外線撮影をすると一五二〇年の年紀が読み取れるが、さらに奥の層を観察することで数度の描きなおしの前の最初の状態が明らかになり、一五〇七年と判読することが可能となった。⁷ この一五〇七年という年代も途切れた線の読み取りによるため、今後さらなる調査が求められるだろうが、フックスはこの年代が支持できる要因として、トラボルトが一五〇五年に死去したことを挙げ、本作も死後数年以内の制作が適切であると述べている。⁸

作品が設置されたレーゲンスブルクの聖エメラム修道院はどのような場所であったのだろうか。この修道院は、レーゲンスブルクで

殉教した伝道司教聖エメラムの墓所にベネディクト会修道院として、七三九年に創建された。⁹ 八世紀から十一世紀には神学や哲学、天文学や芸術の中心地として栄え、九七五年には司教区や帝国から独立した修道院として認められる。一二九五年には神聖ローマ帝国直轄の修道院となる。¹⁰ レーゲンスブルクは一二四五年に帝国自由都市として認められたが、これをきっかけにレーゲンスブルクにおいて帝国自由都市・司教区・聖エメラム修道院という三つの勢力が存在することとなり、聖エメラム修道院も自治権を持つ強力な存在になっていた。

この修道院の建築は、創建時は聖エメラムの墓所の上に中央祭壇が置かれたロマネスク様式の聖堂であった。¹¹ 一〇四九年には修道僧が聖デュオニシウスの聖遺物の獲得を証言したことにより、司教区に匹敵するほどの勢力を有すようになったが、その頃聖デュオニウスを祀る西側翼廊が建てられる。¹² 一〇六二年の火災により内陣が再建され、一一六六年にも火災により長堂と側廊がゴシック様式に改築され、天井に交差ヴォールトが使用された。¹³ 一七三三年にはコスマス・ダミアン・アザム（一六八六―一七三九年）とエギト・クワイリン・アザム（一六九二―一七五〇年）の兄弟によってバロック様式に大幅に改築された。¹⁴ そのため現在は、外観はロマネスクとゴシック様式で内部はバロック様式が混在する修道院となっている（挿図2、3、4）。

では、本作の寄進者トラボルトとはどのような人物だったのだろうか。ヨハネス・トラボルト（一四二五年頃―一五〇五年）はイタリアで学び、レーゲンスブルクで法律家や外交官の職を務めた町の名士であった。以下はトラボルトの詳細な経歴である。¹⁵ 一四五七年



挿図2 聖エメラム修道院 左から聖ミカエル礼拝堂、修道院礼拝堂



挿図3 聖エメラム修道院門 1235-50年



挿図4 聖エメラム修道院内部 1733年

にハイデルベルク大学で文学学士を取得したのち、一四六七年にはパドヴァ大学で教会法修士号を取得する。パドヴァ大学ではドイツ初期人文主義者ヨハン・メンデルやヨハン・トレスターと知り合う。この時のちのレーゲンスブルク市参事会法律顧問となるカスパー・カントナーと親交を結んだことが、トラボルトがレーゲンスブルクで法律顧問の仕事をするきっかけとなった。¹⁸⁾

イタリアからドイツへ帰国後は、まずレーゲンスブルク司教座聖堂参事会の裁判所書記官の職を得る。一四七六年からレーゲンスブルクで法律家となる。翌年からレーゲンスブルク参事会の依頼を受け、レーゲンスブルクと神聖ローマ皇帝フリードリヒ三世の王室裁判所や宮廷との友好関係を保つための外交官としての仕事を務める。¹⁹⁾一時レーゲンスブルクを離れ、一四八二年にはインゴルシュタット

大学で教会法の教授を務めた。この時には教会法の博士号を取得していたと思われる。²⁰⁾一四八六年に帝国自由都市レーゲンスブルクが一時的にバイエルン公アルブレヒト四世の支配下に入ると、バイエルの不当な干渉に対抗するために、一四八七年にトラボルトはレーゲンスブルク司教の法律顧問の役職についた。²¹⁾一四九五年にはレーゲンスブルク参事会の外交官としてヴォルムス帝国会議に同行する。死の数年前に資産を財団に寄付しており、聖エメラム修道院への多額の寄付金により同修道院に埋葬されることとなった。²²⁾以上のことから、トラボルトはイタリアで留学時からドイツ人文主義者とも交流が深い人物であったということが出来るだろう。また、単なる法律家という以上に、外交官としてレーゲンスブルク市参事会の仕事を多く受けた、いわば町の命運を握る人物であったと思われる。アルトドルファーは一五一七年に市の参事会員になったが、トラボルトの注文を受けたと考えられる一五〇五年には、彼のような市の有力者から一目置かれる存在であったことがわかる。

二、エピタフの意味とその位置

現在この作品の注文に関する資料は残っていないため、設置場所も長年謎のままであった。「二人のヨハネ」という特異な画像とともに、本作の制作意図についても多くの議論があった。²⁴⁾そのアルトドルファーの《二人のヨハネ》が聖エメラム修道院で設置されていたことは、以下のレーゲンスブルクの年代記者アンドレアス・ラゼリウスの一五九八年の記録からヴァインツインガーが初めて明らかに

した。⁽²⁵⁾

…そこ（司教テュトーの墓の近く）の、回廊に入る扉の上に美しくみごとな絵画が掛けられている。それは洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネを美しい風景とともに描いたもので、市の参事会員アルブレヒト・アルトドルファアの作品である。⁽²⁶⁾

本作品は、一三三・六×一七三・二センチという、アルトドルファア作品の中ではサイズが大きく、アルトドルファアの風景画の発展の中でも重要な位置を占めるとされてきた。⁽²⁷⁾その後本作とトラボルトの銘板との関係が一九九五年にフークマンによって初めて指摘されたこと⁽²⁸⁾で、作品解釈は画期的に進んだといえる。これは今まで不確かであったアルトドルファアの初期作品の注文主が明らかになったという点も重要なことである。以下はそのフークマンが指摘した、一五六〇年の聖エメラム修道院の修道院長アンブロジウス・マイホーファーのための写本に記されていた、同修道院の目録の箇所である。⁽²⁹⁾

福音書記者ヨハネが福音書を書き留めているとき、天に太陽をまとつた寡婦が現れた。もう一人は洗礼者ヨハネで、羊がそれを示している。民に教えを授けるときのように彼は光を放つ。その永遠の世界に生きているのは、神の教令と教会法を教授した卓越した博士、トラボルトその人である。彼はこの彫刻大理石の下に静かに眠る。八〇年の生涯であった。⁽³⁰⁾

この記録の意味について、フックスは以下のように分析する。それは、これは単なる《二人のヨハネ》の説明ではなく、本作の枠に記されていた現在は失われている銘文を示すものだということである。⁽³¹⁾なぜなら銘文の後半部分に「…永遠の世界に生きているのは：トラボルトその人である。」といった、注文主や画家でなければ知りえない様な絵の解釈の根幹に関わる記述があるからである。フックスは《二人のヨハネ》の絵画には埋葬のための墓碑の役割があったことを指摘する。⁽³²⁾現在も聖エメラム修道院にある墓の銘板、エピタフ（挿図5）からは以下の銘文が読み取れる。⁽³³⁾

一五〇五年一〇月二十八日、ヨハネス・トラボルト、教会法博士、永眠する。⁽³⁴⁾

このような赤大理石に銘文が彫られた埋葬のための彫刻は、十五



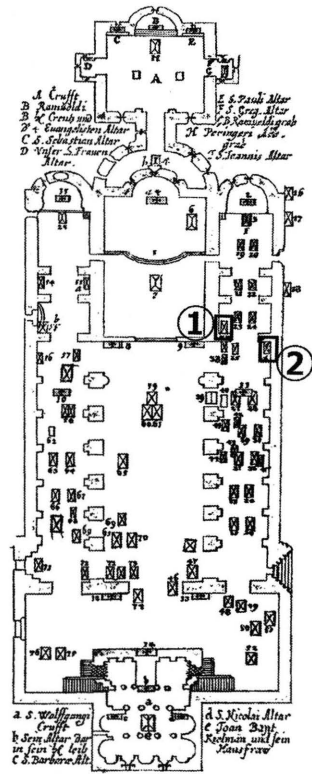
挿図5 ヨハネス・トラボルトのエピタフ
1505年

—十六世紀に同修道院と関係の深い司教や修道院長のために制作されているが、トラボルトの銘板も同様の形態をしている。現在彼の銘板は修道院の南側の側廊にあるが（挿図6）、一六八〇年の教会の見取り図を見ても、トラボルトの銘板は司教テュトー（八九三—九三〇年）の墓と同じ区画にあり、当時からほぼ同じ場所に位置していたことがわかる（挿図7）。この一六八〇年の見取り図はコエレスティン・フオーグル修道院長（一六五五—一六九一年）在任時の改築が反映されたものになるが、一五〇五年からこの時期までに他の改築の記録は見られないため、トラボルトとテュトーの両方の墓碑の位置は不変であったと推察できる。さらにこの区画は、向かい側には司教聖ヴォルフガングやテュトーの墓碑、側廊突き当りには聖エメラムの墓があることから、修道院と関係の深い重要な聖人や聖職者の銘板が設置される場所であったといえるだろう。トラボルトは生前同修道院に多くの寄進をしており、修道院の参事会員であったなど、修道院にとって重要な存在であったといえるが、埋葬の際にはとりわけ特別な計らいがされていたことが考えられる。

それでは《二人のヨハネ》の絵はどこに設置されていたのだろうか。前述のラゼリウスの記録では「そこ（司教テュトーの墓の近く）の、回廊に入る扉の上に」掛けられていたとあるが、トラボルトの銘板の近くには現在扉は見られない。そこで筆者は元々この区画に回廊へと繋がる扉があった可能性を指摘する。一六八〇年の見取り図（挿図7）を見ると、北側の同じ区画の側廊には二つの扉が描かれているが、トラボルトの銘板がある南側には扉が一つしか見られ



挿図6 聖エメラム修道院の内陣横の南側の側廊 左手の柱にはトラボルトの銘板が、右手のグリザイユ画の下に司教テュトーの机型の墓が見える



挿図7 1680年の聖エメラム修道院平面図
①トラボルトのエピタフ
②テウトーの墓

ないため、この区画、おそらくテウトーの墓の左手に回廊へと繋がる扉があり、その扉の上に《二人のヨハネ》が掛けられていたことが推測できる。イエーレはラゼリウスの言う「回廊に入る扉の上」に掛けられていたことについて、ここが修道僧の修道院への入り口になっていたことから、扉を出る際にはこの絵がよく目に入る位置にあったことを指摘する⁽³⁸⁾。また修道僧たちはこの絵のプログラムを理解することが出来、当時の評判を集めた可能性を示唆している⁽³⁹⁾。

エピタフに彫られた彼の身振りや持物を詳細に見ると、他の埋葬者のそれとは異なる性格を持つことがわかる。中世以降、墓碑銘には生前の身分を表す衣服をまとった埋葬者像が彫刻されてきた⁽⁴⁰⁾。聖エメラム修道院でも、現存するものでは一三八五年から一四二三年まで司教像を表したエピタフが確認できる⁽⁴¹⁾。それらはすべて同様の表現をしており、修道院長ヨハネス・ハウナーの銘板(挿図8)のように、司教冠を被り司教杖を持ち、しばしば足元には紋章が彫ら



挿図8 修道院長ヨハネス・ハウナーのエピタフ 1402年

れていることもあるが、特別な身振りは認められない⁽⁴²⁾。トラボルトはやや左に体を向けて左手には杯を持ち、右手でそれを指示している。これは当時の一般的な描写であった、福音書記者ヨハネが杯を指差す身振りと類似している⁽⁴³⁾。このことから、トラボルト自身の意図に基づき、特徴的な身振りが加えられた可能性が指摘できる。

十五世紀末以降のドイツのエピタフでは、人文主義の影響により古代ローマ時代を模範にした死者の功績を称える詳細な銘文が書かれるようになったが、トラボルトも《二人のヨハネ》の画枠に自身を称賛する銘文を記している。もともと当時のドイツでは磔刑像や復活のキリスト像の足元に埋葬者やその家族が描かれるエピタフはよく見られ⁽⁴⁵⁾、その際銘板の枠には生没年と死後の救済を願う一文が記されていた⁽⁴⁶⁾。トラボルトの場合、今まで一つの板に彫刻されていたエピタフの枠と神や聖人の像と寄進者像を、画枠と絵画とエピタ

フに区別して表しているという点で、今までとは異なる類型に属しているといえる。トラボルトを称賛する画枠の銘文からも、絵画とエピタフの内容が関連した意味を持つことは明白であろう。トラボルトはドイツ人文主義の先駆者の一人であったと指摘されているが、エピタフに見られる身振りは、自身も三人目のヨハネとなり、人文主義者としての名声が永遠に続くことを願う彼の意思を示しているのではないだろうか。

トラボルトとアルトドルファーのように、当時のドイツでは人文主義者が画家にエピタフ制作を依頼した例はいくつかみられる。例えばドイツの人文主義者コンラート・ツエルティス（一四五九—一五〇八年）は、ハンス・ブルクマイアーに構成について詳細な指示を行い、版画によるエピタフを一五〇七年に制作させている。⁽⁴⁸⁾ デューラーは一五二〇年代にピルクハイマーやエラスムスのために「学者の肖像」のエピタフ版画を制作しているが、ツエルティスは、古代ローマの彫刻にみられるような王の桂冠詩人の記念碑の型を採用している点で、人文主義者のためのエピタフの一つの模範を示したといえるだろう。⁽⁴⁹⁾ また、一五二九年のヨハネス・クスピニアン（学問的な栄誉のもとに）クスピニアンは生き続けるだろう。」という銘文が記され、故人の不滅というよりも、彼の著書の名声と評判の永遠化が強調されているという点でも注目される。⁽⁵⁰⁾ このような古代ローマに倣った、故人の生前の功績と栄誉を称え永遠化を願う墓碑の銘文はルネサンス期の人文主義者の間で流行し、イタリアでは十五世紀半ばから見られるが、ドイツでもツエルティスの人文主義

運動の影響で多く制作されるようになった。⁽⁵¹⁾ トラボルトのエピタフ制作にもこのようなドイツ人文主義の影響が見られると筆者は考える。

三、レーゲンスブルクの人文主義

トラボルトは町の有力者であり、人文主義者の知的サークルとも交流があったことが見て取れるが、彼を称えるような銘板が設置された聖エメラム修道院では、人文主義がどのように受容されていたのだろうか。レーゲンスブルクは人文主義の中心地ではなかったが、聖エメラム修道院がその拠点の一つとなっていた。十五世紀の聖エメラム修道院図書館には二千冊以上の蔵書があり、ラテン語やギリシャ語の古代の書物などその分野は多岐にわたっていた。⁽⁵²⁾ とりわけ重要な存在として前述のドイツ人文主義の第一人者であるコンラート・ツエルティスが挙げられるだろう。彼は同修道院の修道士と所蔵図書について書簡のやりとりをするなど親交を結んでいた。⁽⁵³⁾ このようにツエルティスをはじめとした人文主義者達が修道院図書館を利用することにより、人文主義的教養を身に着けた修道僧が増加したが、このような「修道院人文主義」が彼らの拠点となっていたのである。⁽⁵⁴⁾ またツエルティスはレーゲンスブルクでの仕事や滞在の記録があり、一四九二年から一年間、レーゲンスブルク大聖堂付属学校でラテン語講師として勤めている。⁽⁵⁵⁾ 一五〇一年には彼によって同修道院で十世紀のベネディクト会修道女で詩人、劇作家のロスヴィータの著作が発見され、同年に出版された。⁽⁵⁶⁾ それは聖書と聖書

外典の内容がウエルギリウスやオウディウスの著作を引用しながら詩作品として表されたものである。彼女はドイツ最初の女流詩人として注目され、ロスヴィータの著作を発見したことがドイツ人文主義の高揚につながった。⁽⁵⁷⁾一五〇五年にこの都市で聖職者のための詩学学校が開校されたことも、⁽⁵⁸⁾同地での人文主義の受容を示す一例だといえる。

聖エメラム修道院がドイツ人文主義運動で果たした役割を考えると、同修道院で人文主義者から注文を受けていたアルトドルファーにとつて、人文主義にかかわるような知識は必要であつたと思われる。当時のドイツ国内での人文主義の称揚から、《二人のヨハネ》のように、人文主義者の指示による絵画を描くことは画家としての評判を高めることに繋がつたのだろう。また画家は一五〇八一—一五一〇年の間、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世の秘書であるヨーゼフ・グリウンペックの仲介により『マクシミリアン伝』の制作に携わっており、その際に人文主義サークルと接触していたことが推測される。⁽⁵⁹⁾グリウンペックは前述の詩学学校をレーゲンスブルクで開校した人物であり、人文主義的素養を彼から教わつていたことも考えられるだろう。⁽⁶⁰⁾

本作品における個々のモチーフの解釈や、銘板と組み合わせられた制作意図については、確たる分析はなされていないのが現状である。前述のように、聖エメラム修道院がドイツ人文主義の拠点であつたことから、当時の人文主義者の銘板がどのような意味を持っていたのかについて、さらに調査する必要があると考える。本作で何よりも特徴的なのは絵画と墓の銘板がともに設置されたことであるた

め、一五〇七年以前における同様の例を検討することで、ドイツにおける画家と人文主義者との関係がより明確になるだろう。

本作が前述の年代特定でアルトドルファーの初期の作品であつた可能性が浮上したことも意義深いといえる。今までの時期のアルトドルファーは小規模の作品を制作していたと考えられていたが、この発見は初期のアルトドルファー作品研究に新たな視座を与えるものであつた。今後は本作の人文主義的要素についてさらに詳細に検討し、「二人のヨハネ」としての図像の特異性についても分析したい。また本作で広大な割合を占める風景表現についても総合的に考察する必要があるだろう。

図版出典

図1 The prometheus Image Archive (<http://prometheus-bildarchiv.de/>)

図2, 3, 4, 5, 6, 8 筆者撮影

図7 Coelestin Vogl, *Mausoleum oder Herrliches Grab des bayerischen Apostels und Blutzeugens Christi Sancti Emmerami*, Augsburg, 1680.

註

- (1) アルトドルファーの《二人のヨハネ》の主な先行研究は以下を参照。Franz Winzinger, *Die Gemälde Albrecht Altdorfer*, München, 1975, pp. 84-86; Franz Fuchs, "Neues zu Altdorfer die Bildtafel 'Die beiden Johannes' und ihr Stifter Johannes Trabolt (+1505)", Helmut Altner (ed.), *Blick in die Wissenschaft. Forschungsmagazin der Universität Regensburg*, 12,

- Regensburg, 2000, pp.20-28; Oliver Jehle, "Schiffsreise und Seelenflug. Altdorfer und die drei Johannes", Christoph Wagner (ed.), *Albrecht Altdorfer. Kunst als zweite Natur*, Regensburg, 2012, pp.213-223.
- (2) アルトドルファーの《エンブレムと複雑絵上の林鳥》(一五〇一年) ヘルマン・絵画館)にも特異な図像が見られ、泉のモチーフや銘文から、やはりレーザン・スブルクの人文主義と関係があると思われるが、それについては、二〇一五年五月に美術史学会全国大会(於岡山大学)で口頭発表を行った。
- (3) Fuchs, *op.cit.*, p.27.
- (4) Carolin Schmuck, "beruht bis auf bessere zeiten` eine Galerie für Regensburg", *Verhandlungen des Historischen Vereins für Oberpfalz und Regensburg*, 138, 1998, p.104.
- (5) Ursula Fugmann, "Die beiden heiligen Johannes", *Regensburg im Mittelalter. Katalog der Abteilung Mittelalter im Museum der Stadt Regensburg*, Vol.2, 1995, p.194.
- (6) Fuchs, *op.cit.*, p.27f.
- (7) *Ibid.*, p.28.
- (8) *Ibid.*
- (9) Jochen Zink, "Neue Forschungen zur Baugeschichte von St. Emmeram und St. Rupert", *St. Emmeram in Regensburg. Geschichte-Kunst-Denkmalpflege*, Kallmünz, 1992, p.121.
- (10) Andreas Kraus, Dieter Albrecht, "Die Reichsklöster", Andreas Kraus (ed.), *Geschichte der Oberpfalz und des bayerischen Reichskreises bis zum Ausgang des 18. Jahrhunderts*, München, 1995, p.273.
- (11) *Ibid.*, p.275.
- (12) Karl Hausberger, "Regensburg", Walter Kasper (ed.), *Lexikon für Theologie und Kirche*, Vol.8, Freiburg, 1999, col.964.
- (13) 現在も修道院の正出入口上部にはロマネスク様式の絵画が残されている。
Zink, *op.cit.*, p.123fol.
- (14) Fritz Arens, "Das Kloster bei St. Emmeram in Regensburg. Seine Anlage und Baugeschichte im Mittelalter", Max Piendl (ed.), *Quellen und Forschungen zur Geschichte des ehemaligen Reichsstiftes St.Emmeram in Regensburg*, Kallmünz, 1961, p.215.
- (15) *Ibid.*, p.223.
- (16) Harald Giess, "Restaurierungsgeschichte und Geschichte der Denkmalpflege am Beispiel von St. Emmeram", Piendl (ed.), *op.cit.*, p.204.
- (17) エルネストの註文を参照して、エドワードを参照。Franz Fuchs, "Trabolt, Johannes", Laetitia Boehm (ed.), *Biographisches Lexikon der Ludwig-Maximilians-Universität München*, Vol.1, Berlin, 1998, p.440f.
- (18) *Ibid.*, p.440.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*
- (21) *Ibid.*, pp.440f.
- (22) Jahre, *op.cit.*, p.214.
- (23) Winzinger, *op.cit.*, p.147.
- (24) Otto Benesch, *Der Maler Albrecht Altdorfer*, Wien, 1939, p.12.
- (25) Winzinger, *op.cit.*, p.151.
- (26) Bayerische Staatsbibliothek München, Gm 3019. "...Zu allernächst dabey (beim Grab des Bischofs Tuto), oberhalb der Thür, wie man zum Creuzgang hinein gehet, ist ein schöne, lustige und kunstreiche Tafel, daran die zween S. Johannes der Täufer und Evangelist artig abgemahlet sampt einer schönen Landschaft, die Albrecht Altdorfer, deß Raths allhie, gemahlet hat." 註文の通り、エドワードを参照した。特に、林鳥の図は、エドワードの参集に由来。原文の註文には「トナーの繪は、その言文を、ホルン・クハニエの註文に採り、その参集に由来」。Merian Matthäus, *Topographia Bavariae*, Frankfurt, 1644, p.48; Max Piendl, *Quellen und Forschungen zur Geschichte des ehemaligen Reichsstiftes St.Emmeram in Regensburg*,

- Kallmünz, 1961, p.132f; Andreas Raselius, Peter Wolf (ed.), *Regensburg. ein Stadtrundgang im Jahre 1599*, Regensburg, 1999, p.84.
- (27) Winzinger, *op.cit.*, p.81.
- (28) Ursula Fugmann, "Die beiden heiligen Johannes", Martin Angerer (ed.), *Regensburg im Mittelalter*, Vol.2, Regensburg, 1995, p.194f.
- (29) Bayerische Staatsbibliothek München, Clm 14 900.
- (30) "Mystica theosophus dum scribit visa Iohannes, Emicat in celo mulier sub solis amictu. Alter erat sacer et celebris Baptista Iohannes Agnum demonstrans populosque docendo refulgens. Non secus egregius doctor cognomine Trabolt Fulgeat in celis et vivat iugiter evo, Qui docuit decreta patrum legesque sacratas, Dulciter hic recubat sculpto sub marmore humatus. Octoginta annis in mundo vixerat isto." 訳註を参照。Fuchs, *op.cit.*, p.24.
- (31) *Ibid.*
- (32) *Ibid.*
- (33) Epitaph には①古代ギリシャ時代に由来する弔辞②死者のための銘文付き記念盤の二つの意味がある。本論でのエピタフとは②の意味を指す。エピタフには故人の肖像や紋章が描かれ、一般的に柩の部分に銘文が記される。教会の壁や柱に設置され、必ずしも墓の場所とは一致しない。意味については以下を参照。Annette Zvahr, *Brochhaus. Enzyklopädie*, Vol.8, Leipzig, 2006, p.204. シェーネンは、十四世紀以降アンダハツビルトと祈る奇進者の構図のエピタフが現れることを指摘する。最初期にはアンダハツビルトとして玉座または立ち姿の聖母子像が描かれたが、一五〇〇年前後からピエタや磔刑像、悲しみの人が選ばれるようになった。また本文でも述べるように、ルネサンス期には人文主義者のための肖像と銘文が表されたエピタフも登場する。Paul Schoenen, "Epitaph", Ernst Gall (ed.), *Reallexikon zur deutschen Kunstgeschichte*, Vol.5, Stuttgart, 1967, col.872-921.
- (34) "Anno 1505 die 28 mensis octobris obiit venerabilis et egregius dominus Johannes Trabolt decretorum doctor hic sepultus cuius anima requiescat in pace." 訳註を参照した。Fuchs, *op.cit.*, p.24.
- (35) Coelestin Vogl, *Mausoleum oder Herrliches Grab des bayerischen Apostels und Blutzengens Christi Sancti Emmerami*, Augsburg, 1680, p.14.
- (36) Zink, *op.cit.*, p.124.
- (37) Jehre, *op.cit.*, p.214.
- (38) *Ibid.*
- (39) *Ibid.*
- (40) Schoenen, *op.cit.*, col.875f.
- (41) Herbert Köbler (ed.), *Die Grabdenkmäler in St. Emmeram ein Rundgang*, Regensburg, 2008, p.53, 59.
- (42) *Ibid.*, p.89.
- (43) Martin Lechner, "Johannes der Evangelist", Engelbert Kirschbaum (ed.), *Lexikon der christlichen Ikonographie*, Vol.7, Roma, 1994 (1974), col.119f.
- (44) Martin Otto, "Konrad Peutinger und die Inschriften des römischen Augsburg. Die 'Romanae vetustatis fragmenta' von 1505 im Kontext des gelehrten Wissens nördlich und südlich der Alpen, Mathias Ferber (ed.), *Ein Augsburger Humanist und seine römischen Inschriften Konrad Peutingers "Romanae vetustatis fragmenta in Augusta Vindelicorum et eius dioecesi"*, Lindenberg, 2014, p.31.
- (45) 絵画でも聖母子像ととりなする聖人、奇進者とさう構図はよく描かれ、エピタフと同様の意味を持つ。Schoenen, *op.cit.*, col.873-876, 885; Panofsky, *op.cit.*, p.64f. ランクナーはドイツでとりわけ磔刑像を伴うエピタフが受容された要因として、ドイツ神秘主義の影響により、十四世紀以降キリストの受難の姿がアンダハツビルトに表され、個人の私的な祈りが浸透していたことを挙げていす。Langner, *op.cit.*, p.10, 14.
- (46) Schoenen, *op.cit.*, col.881.
- (47) Jehre, *op.cit.*, p.213.

- (48) Jörg Robert, "Sterbebild des Conrad Celtis", id. (ed.), *op.cit.*, p.175.
- (49) *Ibid.*
- (50) "Historie immense monumenta eterna reliqui. Vivus in his semper Cuspinianus erit." 訳は以下を参照。Panofsky, *op.cit.*, p.76.
- (51) Panofsky, *op.cit.*, p.77.
- (52) Harald Müller, "Maria oder Minerva! Möglichkeiten und Grenzen humanistischer Bestätigung in spätmittelalterlichen Benediktinerklöstern", Peter Schmid (ed.), *Gelehrtes Leben im Kloster. Sankt Emmeram als Bildungszentrum im Spätmittelalter*, München, 2012, p.109.
- (53) シェルナースと聖エムラト修道院図書館司書であったローレンツ・アインジャーやエムラトス・ダウトの書簡のやり取りの記録が残る。Franz Fuchs, "St. Emmeram im 15. Jahrhundert", Peter Schmid (ed.), *Gelehrtes Leben im Kloster, Sankt Emmeram als Bildungszentrum im Spätmittelalter*, München, 2012, p.29f.
- (54) *Ibid.*
- (55) Franz Josef Worstbrock, "Konrad Celtis", Boehm (ed.), *Biographisches Lexikon der Ludwig Maximilians Universität München*, Berlin, 1998, pp.65-68.
- (56) *Hrosuithae carmina*, Gandeshemensis, 11c.
- (57) Ursula Hess, "Ceritas liest Celtis die Leviten. Kritische Lektüre als geistliche Unterweisung", Jörg Robert (ed.), *Amor als Topograph. 500 Jahre Amores des Conrad Celtis*, Schweinfurt, 2002, pp.115-118.
- (58) Dieter Wuttke, "Josef Grünpeck", Otto Stolberg-Wernigerode (ed.), *Neue Deutsche Biographie*, Vol.7, Berlin, 1966, p.202f.
- (59) *Ibid.*
- (60) Wuttke, *op.cit.*, p.203.

藪田淳子 (やぶた・じゅんこ)

二〇一三年 神戸大学大学院人文学研究科博士課程前期課程修了
 二〇一三年—二〇一四年、二〇一五年—現在 レーゲンスブルク大学留学
 現在 神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程在籍
 二〇一六年— 日本学術振興会特別研究員 (DC2)